〈鬼〉をめぐって (3)

鬼のまま すてきママ

松井るり子

鬼のはなしを読むなら、田辺聖子『鬼の女房』（角川文庫）がいい。『今昔物語』『古今著聞集』『篁物語』等々から鬼の話が集められ、そこここで鬼が暴れ回っている。怪力がありそうな毛むくじゃらの大男にツノが生えキバが生えたむくつけき鬼も怖ろしいが、女の鬼はもっと怖い。男鬼はお酒飲ませて美女でもあてがっておけば何とかなりそうな気がするが、女鬼の話は我がことのようで怖い。

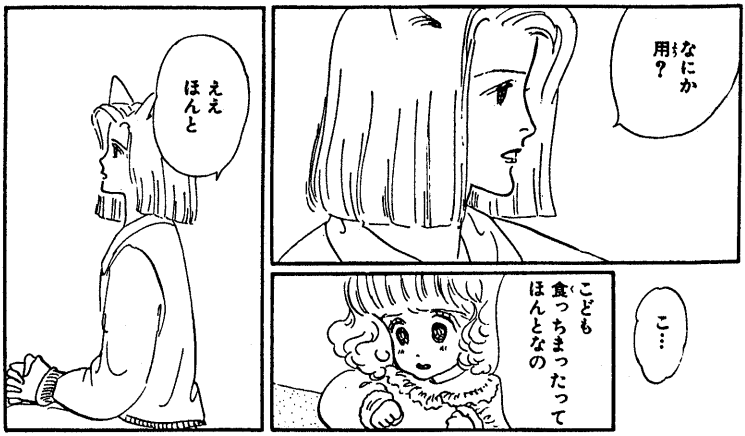
例えば東山の人食い鬼の話。身寄りのない宮仕えの若い女が、夫もなく妊娠してしまった。ここで失脚したら野たれ死にである。女は気強くふるまって気どられぬようにし、一人でこっそり山奥で産み落して捨てて来ようと決心する。月満ちて出産のきざしがあり、女の童一人を供に東山の方に行くと古い家がある。ほっとして休んでいると頭の白い老婆が現れて同情し、親切にお産の世話をしてくれた。捨てようと思っていた赤ん坊だが、かわいさに情が湧き、乳を飲ませたりして数日たった昼寝の折りふと目を覚ますと、老婆が近々と寄って赤子を眺

めている。老婆は気付かれているとも知らず「穴甘気（アナウマゲ）、只一口（タダヒトクチ）」（田辺訳「何とうまそうな、ただひとくちに、わんぐりと……。いひひひ」こういう語り口が古典拒否症を治してくれます）とひとりごとを言っていた。この老婆は鬼だったと悟った女は女の童（めわらわ）に赤ん坊を背負わせて走りに走って逃げた。子どもは里子に出したという。

長く生きた老婆が鬼になるというのは、餓えて人肉嗜食者になったのかも知れないと田辺氏は考察するが、そういう気持ちの芽がばあさん途上の私に全くないと言い切れないところが怖い、二番目の子が生まれたばかりの頃、三歳だった娘が赤ん坊をなでたりさすったりしながらひとりごとを言っていた、「かわいこねっ。たべちゃいたい。」幼児がこういうことを言うということはすなわち私が普段そう言って見せているということに他ならない。全く自覚していなかったのだが、そう思って考えてみればもしかすると言っていたかも知れない。そうでなくても私は人前でもつい赤ん坊を抱きしめ頬ずりしつまんだりなめたりくすぐったりしてしまうので、言葉にせずとも全身で「食べちゃいたい」と言っていたかも知れない。

かわいさ余って食べたいくらいが一歩進んで、うさぎや猫のお母さんがひどく脅えると自分で産んだ子を食べてしまうあの気持ちは妙にわかったりする。大島弓子『ばら科』（白泉社『綿（わた）の国星（くにぼし）』6巻収録）の佐山猫のお母さん。三匹生まれた子猫のうち二匹がもらわれて行き、残りの一匹を「くっちまったってほんとなの？」とこのマンガの主人公のチビ猫にきかれて「ええほんと」と遠くを見るような目で答える編物好きの母さん猫が好き。「そんとき頭からくったの　しっぽからくったの」「じゃ…じゃあ味は」ときかれても「夢中だったから覚えてない」とだけ言う。はたから見れば猫肉嗜食猫とでも鬼猫とでも名付けられようが、これ以上子どもを取り上げられまいとして「くっちまった」彼女の気持ちはよくわかる。東山の鬼婆の昔にも、これと同じ悲しみがなかったとはどうして言えようか。

あるいはまた年老いた母親が「樹の上の鬼」になる話



▲「ばら科」より

もある。遠い昔いとおしんで育てた二人の赤ん坊も壮年となり、たくましい猟師の兄弟となった。息子たちの関心は母から離れて活力ある外の世界に向かい、反対に老母の心は閉ざされて過去にさかのぼる。夢ともうつつともつかぬ想いの中で「憤怒にも似た愛執の念」のみが燃えさかり、その情念はついに老母を鬼と変ずる。母は猟に出た息子たちを樹上で待ち構え、髻をつかんで上に引き上げ、食らおうとした。「人ノ祖年痛ウ老タルハ必ズ鬼ニ成テ此ク子ヲモ食ハムト為ル也ケリ」。今昔物語の作者はこう断定する。

私にも小さい息子が二人いるが、こんなにかわいい子たちがやがて見上げんばかりの髭面の男になり、私のことなど忘れてギターだバイクだ女の子だ（例えばの話）等々に夢中になる日、のけものにされたように感じて鬼にならないとどうして言えよう。

いっそのこと女鬼を正視してみる。草野心平の『鬼女』（新潮文庫『草野心平詩集』）はこうだ。「うるしの髪を右手でかきあげ。うすら笑ひと青い頬。血糊の口

をがぶがぶすすぎ。……髪毛押しわけて角がたち、水鏡の笑ひの口に牙がのび。……ぎいぎやつぎやあ。おひかぶさつた崖にこだまし。」この鬼はきっともともとがタヌキ顔のおかちめんこではない。漆黒の髪、ぬけるような肌。美しい女が鬼になって食らい、血の紅で口のまわりを彩るなんぞ、きらびやかなほど壮絶な図である。昔話の鬼女『牛方と山姥』の山姥は魚を「みりみり」食べ、牛を「みちみち」食べ、噛み切れぬ皮を「にちゃにちゃ」噛む、『飯食わぬ女』の鬼女は夫の友人の男を「がしがし」食い、『鬼の妹』のあせっくわは牧場の牛を横抱きにして音もなくその血を吸いつくす。（関敬吾『日本の昔ばなし』1～3、岩波文庫）

こわいねー。女の鬼は怖い。『鬼の女房』の中の嫉妬に狂う鬼など見ていると、私自身と切り離されて獄の中に居る大悪人ではなく、今の私の延長線上に居るんだなと思う。大変だ。私も心して鬼と変じぬよう、「上手な子離れの仕方」「母親の自立」の本など読んで予習し、自制心のコントロールに励み、鬼などとは程遠い慈愛に満ちた母にならねばならぬ、と思う。

ところがせっかく私ががんばって忌避している鬼女であるのに、子どもは間違いなく興味を示し、寄って行くのがけしからんことである。大西広文、梶山俊夫絵『鬼が出た』（福音館書店「たくさんのふしぎ」一九八七年二月号）を手にした時、四歳の娘は一枚の写真に吸い寄せられるように見入っていた。千葉県光町の鬼来迎（きらいこう）というお祭の鬼。「奪衣婆（だつえば）」が小さな男の子を抱っこしている。「抱かれた子どもは怖くて泣き叫んでいるが、これで病気が追い払われる」と解説される。写真の子は後ろ向きで泣き顔が見える訳ではないが、娘は何か感ずるらしい、「この子どうしたの？どうしたの？」と何度もきいてくる。奪衣婆（だつえば）は例えば京都八坂神社の節分の鬼のようなどっしりした金襴（きんらん）の着物につるりとした面をつけた、殿様のような豪華な鬼ではない。夏祭りなのか、単（ひとえ）の着物をさらりと着て数珠を手首に巻いている。もつれてぺたんとなった髪、土気色のでこぼこの面の額にツノが一本、キバも上向きに二本生えているが、怖いという

▶鬼来迎（きらいごう）の奪衣婆（だつえば）

より泣きべそ顔の弱虫のようにも見えてしまう。「婆」という字のついた鬼だからもしかすると女鬼だろうか。初めは子どもを取って食っていたが、自分の子を隠されてから母親の悲しみを知り、以後母と子の護り神と転じた鬼子母神のことなど思い出す。泣かれてでも子を抱きたい。泣かせる悪者になってでも病気を追い出して子を守りたい。一見怖そうでよく見れば泣きそうな顔した婆さん鬼かなあと思いながら、娘と一緒に私もこの写真に見入った。

もうひとつ娘と見とれた絵本は、谷川俊太郎文、タイガー立石絵『ままです　すきです　すてきです』（福音館書店「年少版こどものとも」一九八六年十月号）。プロレスラーみたいな名のこの画家は、同社の「たくさんのふしぎ」などでよくエッシャーばりの不思議世界を開いて見せてくれる人で、好きじゃないのに心ひかれる存在である。うむ。断じて好きじゃない。（とムキになってしまうのが要するにファンである証拠だろうか。不安である）

この本はまず表紙が衝撃的だった。そこに描かれた「すてきまま」がトラ皮のワンピースを着て腕輪をつけ、裸足でタカシマヤの包みと買い物バッグを抱え、坊やの手を引く鬼のお母さんだったから。金髪からにょっきり白い二本のツノ。ヘ文字の笑い目は実にすてきで二本のキバもまたすてき。道行く人々も皆鬼で、ツノ生えバットのような金棒かついだ労務者風赤鬼青鬼に混じって、制服着て学生鞄下げた乙女鬼や、背広着て角封筒持ったビジネスマンスタイルの黄鬼がいる。この黄鬼、首飾りぶら下げて扇子ほどのコンパクト金棒を握っているのが御愛嬌。すてきままと手をつないだ子鬼はママとおそろいのトラ皮パンツからおへそをのぞかせ、とがった耳に不細工な鬼面の坊やだが、いかにもこのママが誇らしいというように笑いつつ、つないでない方の手を上げて私に合図する。

合図された私はうろたえる。このママに負けたと思ったからだ。鬼の姿をした鬼はそれでよいが、人間の姿をした鬼（私）は無限に怖いからだ。キバもツノも露出してしまっていれば、それなりに子どもの方にもやりようがある。だけどいらいらした時の私ときたら、キバやツノをむりやり押し込めて怒るまいと優しげにふるまう。これでも一応鬼になるまいという心構えだけはあるのである。しかし結果的にはかえってそれでスゴミが漂ってしまい、それによって子どもを支配してしまう。かわいそうな娘。

絵本を開くとおはなしではなくてしりとりが始まる。くるくるよじれる紙リボンに書かれるしりとりの言葉と、絵の奇妙な連続。隠し絵。先の坊やがページを渡り歩いてしりとりを進めると、本の中ほどに「ままです」「すきです」「すてきです」も出て来て、ここでも母子はやっぱり手をつないで歩いている、鬼の坊やが長いしりとり遊びの中にうまく隠して言いいたかったのはこのことなのだ。鬼のママが鬼のままの姿で、それでも好きにならずにいられないすてきなママで。変にツノカクシした私のような母を持つ娘より、鬼のママとすっきり和解しているこの坊やの方が幸せかも知れない。五歳だっ

た娘はこの子鬼を「へんへんこぞう」と名付けて愛していたが、私もこの変々小僧とお近付きになりたいと思った。

鬼の母とみごとに和解しているのは、ロシア民話『どこかわからない国のわからないもの』（オクスフォード世界の民話と伝説ロシア編、講談社）のハトのマーシャ。彼女は絶世の美女でまたとないほどの絹の絨毯の織り手である。それを知った王様が彼女に夢中になり、手に入れようとしてその夫である猟師のペトルーシカを亡き者にするため、無理難題を吹っかけて来る。問題の二つ目までは「何でもないわ」と解決するマーシャも、三つ目の「どこかわからない国の何かわからないものを持ち帰れ」というのは一晩中考えて魔法の本も調べ、鳥やけものや魚たちに尋ねてもわからなくて結局夜が明けてしまう。そこでマーシャは夫に毛糸の玉と刺繍したタオルを渡して、糸玉の転がる方に行き、どこへ行ってもそのタオルで身体を拭くように言う。

糸玉がペトルーシカを案内したのは、人食い魔女のババ＝ヤガーの小屋だった。糸を紡いでいたやせた老婆は彼を見るや「へっへ、へっへ」と笑い、晩飯にお前を食べてやると言う。彼は怖れずに、ほこりまみれはおいしくないから体を洗わせて下さいと物わかりのよい食べ物役をして見せ、タオルで体を拭く、するとババ＝ヤガーはその刺繍が娘の手になるものと知り、娘婿への無礼をわびて歓待する。おはなしは続くがババ＝ヤガーのおかげでどこかわからない国のわからないもの（姿の見えぬ万能の召使い）も見つかり、最後には夫婦で幸せになる。

マーシャは自分の母が実は人食い鬼のババ＝ヤガーだということを、できれば夫に知らせたくなかったのではないだろうか。母の所へ行けば何かよい知恵があると知りながら、何とか自力でやってみようと夜通し考えたり調べたり尋ねたりする。それでもわからなくて、いよいよ夫を産みの親に会いに行かせねばならなくなった時、見る者が見ればマーシャの仕事と一目でわかる手技（てわざ）の品を持たせて、あとはなるようになるだろうと、自分を捨

てた優しいあきらめのようなものを糸玉に託す。

マーシャの糸玉は夫をとんでもない化物のところに連れて行った。いきなり「ロシア人の血の匂いがする」と迎えられても妻の刺繍の効力を信じて逃げたりせず、娘婿をわかった後の態度の豹変もあざ笑ったりせずに、妻のおかあさんとしてごく自然に悩みを打ち明ける。悪い王様のような単なるメンクイ男なら、ババ＝ヤガーを目の前にして今は美しいマーシャも年を取ったらかようにすさまじい鬼ばばあになるのかと恐れをなし、落胆することだろう。ペトルーシカも若い夫としてできれば考えたくないことではあろうが、毛糸の玉がひとりでに老婆の小屋に転がって行ったように、ハトのように穏やかで優しいマーシャもその母のような存在への途上であるかも知れぬことを、時の流れは彼に教えるだろう。少なくともそれら二つが切り離された別物ではなく、同一線上の二つの端っこにすぎないことを知らねばならない。幸いペトルーシカは女の上っつらの一皮だけを見る男ではなく、絹織りの絨毯、毛糸の玉、刺繍のタオル（マーシャの技）、糸紡ぎ（ババ＝ヤガーの仕事）といったもので表現される女性族特有の知恵の前に尊敬と信頼の念を抱いていたので、妻の母のおどろおどろしいようなところも含めて女というものの特性を全てあっさり受け入れた。その純粋な強さこそが彼を救ったのだろう。マーシャもまたここで自分の母は鬼のままとりつくろいもしないでいるが、問題解決能力では一枚上手のすてきままだと言っている。そのメッセージに私も耳を傾けたい。

（つくば市在住）